

第 56 号

会 報

青山学院大学
日本文学会

2022 年 3 月 15 日

(題字) 湯池 孝先生



仮想世界の語用論

近藤 泰弘



たように思う。しかし、ただんと、仮想世界での授業が進むに連れ、演習などでは、仮想会議アプリの中で積極的に発言したり、意見を交わしたりすることもできるようになってきた。人間の順応性は高いものである。

局あまり流行らなかったのは、この仮想空間における指示性の弱さ（ダイクシスの脆弱性）が原因しているのではないかと思う。また、仮想空間には、複数の人が参加しているが、その相互の具体的な位置関係とといったものも存在しない。ABCDの4人が参加しているZoom会議で、誰と誰とが近くにいるということは定義できないわけである。これでは、ダイクシスはうまく機能しないのである。

ただし、日本語学的な観点で、このヴァーチャルリアリティでのコミュニケーションを観察すると、リアル空間でのコミュニケーションとは語用論的に大きく違う点がひとつあること気がつく。それは、話し手と聞き手の作る、二者の相互関係によって成立する空間が、仮想空間にはないことである。具体的には、「これ」「それ」と言った指示詞が非常に使いにくくなっている。「これ」「それは、話し手と聞き手との間の空間を、話し手が「ウチ」「ソト」に区分して、自分に近いものを「これ」、聞き手に近いものを「それ」と言うわけだが、仮想空間では「それ」と言ってもいったい何だかわからない。せいぜい、自分の居るところをさして「こちら」というのが一杯だが、「そこにあるのが」などと言いにくいのはコミュニケーション上の大きな制約である。「Zoom飲み会」などが提唱されたが、結

しかし、実は、これを補うための仮想空間技術はすでに存在する。それは、お互いの人間がアバターになって仮想空間に完全に没入するゲームタイプのものであり、近年はそれを「メタバース」(メタとユニバーズの合成語)と呼ぶ。これなら、現実空間と同じように、相互の位置関係が存在し、ダイクシスも自由に使うことができる。Facebookを始め大手のSNS業者はこの開発にしのぎを削っているのは当然である。しかし、ゲームの中はともかく、一日も早く、そんな心配をしないで、みんなが教室に集まって楽しく授業ができる日が来てほしいし、来年度こそはそうなることを祈っている。

昨年度、今年度の世界を一言で表すならば、コロナの年であったと言えらるだろう。全世界をパンデミックが襲い、数千万人の感染者が出て、ほとんど1年の間、学生が大学に立ち入りすらできない状態が続くという、S号の中ではあり得なかったことが現実化した。日本文学科もその例外ではなく、研究室を閉鎖し、教員も、学生も自宅に居ながらオンラインで授業が行われるということが日常だった。コロナ以前も、Skypeを使った国外との

遠隔授業は一部で行われていたが、非常に特殊な状況に限定されたものであり、誰もが行うものではなかった。それが、一昨年の4月から、まるで一夜にして世界の仕組みが変わったように、「ZoomやWebexといった仮想会議のソフトウェアを使って、授業や教授会が行われるようになったのである。「仮想現実」(ヴァーチャルリアリティ)という言葉は、流行の言葉として、使われてはいたが、大学の日常が、ヴァーチャルリアリティとなったというのは、まさに革命的なことである。

最初の一年の間は、「大学生の日常も大切だ」のように、「日常」というキーワードがよく聞かれた。その「日常」というのは、授業に出た後に、食堂でなげない会話と交わすとか、サークルで先輩後輩との交流をするとか、リアルの「コミュニケーション」がその意味だった

研究余滴

ワークシヨップ

「インド北東部における

記憶と記録」参加報告

佐藤 泉

二〇二二年九月に「インド北東部における記憶と記録」というワークシヨップに参加する機会がありました。残念ながらオンラインでの開催となり、インドのメンバーに直接会うことはできませんでしたが、それでも驚くほど厚みのある対話ができたと感じます。このワークシヨップは、インドの「Zubran」という出版社と笹川財団の共催によるもので、女性や若いライターを対象にしたフェローシヨップの共同研究会です。フェローのみなさんは一様にパソナルにして政治的なテーマをめぐる繊細なリサーチを計画していました。私も講演を頼まれ「沖繩の声を聞く」というタイトルで短い話をしました。なぜインドで沖繩の話をするのか？それはしばらく置くとして、まず、ズバーン出版社を主催しておられ

る、ウルワシー・プターリアさんという作家を紹介したいと思います。

彼女の本は、日本でも『沈黙の向こう側 インド・パキスタン分離独立と引き裂かれた人びとの声』という邦題で刊行されています。おくればせながら準備のために読んだところ、さまざまな意味で衝撃的な本でした。印パ分離独立の際、二〇〇万人もの人びとが着の身着のまま突然そこにひかれた国境を越えま

した。この事件をめぐるインタビュ

ー聞き書きに基づいて構成されたのがこの本です。インド側にいたムスリムがパキスタン側に、パキスタン側にいたヒンドゥーやシーク教徒がインド側に移動し、昨日までの隣人が突然お互いの敵となつてレイプや虐殺、拉致など、女性や子ども達の運命がねじまげられました。語られてこ

なかつた歴史の事実を開示したという以上に、この出来事が人びとの間でどう記憶され、語られてきたか、あるいは語られてこなかつたかに本書は重点をおいています。女性の戦争を書いたアレクシエヴィチの作品を連想させますが、強制改宗やレイプの不名誉を避けるために女性たちが自ら死ぬ、父親が子どもを殺すといった「集団自決」のような事件

も起こっており、深々とした「沈黙」を感じさせる聞き書きとなっております。東アジアでも、それまでなかつた国境線が引かれ、人びとの生死を分けた歴史があります。私たちが知らずにいたインドでの歴史が、東アジアのよく知っている歴史に通じているようにも思われ、その点で「普遍的」な問いを含む本だと感じました。

この間、ズバーンや財団の人とやりとりをしているうちに、インドには「北東部」という問題がある、ということを知りました。北東部の人

はインドの他の地域を「本土」と呼ぶ、そこが日本本土と沖繩の関係を思わせるのだと関係のみなさんが言います。今回、日本と沖繩の関係について話すことになったのはそういう経緯があつたためでした。ウルワシーさんの本にひたひたと満ちていた「沈黙」を感じとりながら、私もあらためて沈黙を浸透させた沖繩の言葉に向き合いたいと思ひながら、講演の準備をしました。

当日、フェローのみなさんの報告に心打たれました。おばあちゃんがミャンマー生まれで日本軍が侵攻してきたときにインド側に逃げて来たという話、ベンガル州の先住民の家

24	20	20	18	17	16	16	15	10	9	9	6	6	5	4	3	2
研究室だより・編集後記	二〇二一年度講義題目	日本文学科同窓会から	研究室探訪／田中祐輔先生編	日本文学科関係書籍	今年度の学生の活躍	院生部会報告	留学生の動向	卒業生より	大学院に進学して	就職活動体験記	コロナ禍の大学生生活	在学生より	春季大会研究発表	日本文学会春季大会	随想	研究余滴

第五十六号 目次

「インド北東部における記憶と記録」小規模フェローシヨップに係るワークシヨップ」笹川平和財団・インドZubran出版社共催 2021年9月24日（金）

二十七年間の幸い

佐伯真一



私は一九九五年四月に青山学院大学に着任しました。二十七年勤めて、間もなく定年です。一九九五年というのは、一月に阪神大震災があり、三月にはオウム真理教の地下鉄サリン事件があった年で、総研ビル十階の研究室の窓から初めて見た景色は、当時の「オウム真理教南青山総本部」の上空をものものしく飛び回っていたヘリコプターの数々でした。

いわば、私は災いと共にこの大学にやってきたわけですが、「いや、

大学にとってはお前が来たのが最大の災いだよ」というのは勘弁してほしいのですが)。その後も、二〇一〇年に学科主任になった翌年には東日本大震災がありましたし、文学部に人文科学研究所ができて所長になってしまった翌年にはコロナ禍があつて、いわゆる「持つてる」というのはこういうことをいうのか（違う？）と思わないでもない二十七年間でした。

震災で合同研究室の書棚が倒れたり、入学式後のオリエンテーションで「君たちが相模原で学ぶ最後の学年です」と挨拶した翌日にキャンパス移転の延期が発表されたりと、二〇一一年の春は激動の日々でしたが、何と言っても最大の災いは、現在まだ終わっていないコロナ禍でしょう。今、責任の重い立場にある方々は本当に大変だと思えます。

しかし、そうした災いはあつたにせよ、全体として見れば、すばらしい先生方と学生諸君に囲まれた、幸いというしかない二十七年間でした。特に、着任してからしばらくの間、二一世紀初頭ぐらいまでの生活は、ほんとうに研究と教育だけに専念できた、幸せな時間でした。昨今の大学にありがちな無駄な忙しさがまだ無い頃、恵まれた環境の中でゆったりとした時間を過ごせたのは、生涯の財産だったとつくづく思います。

これは青山という環境だけではなく、世代の幸運もあるでしょう。私たちの世代は、学生になった頃には既に学園闘争が大方終わっていて、就職にもさほど苦勞せず、大学に就職すれば「先生」として敬ってもらえた、幸せな世代だったと思います。その後の大学、特に人文科学系の環境は少しずつ悪化し、「研究と教育のため」と称する業務により、肝腎の研究と教育に使うべき時間が削られていく一方、という感もあります。自分では、目の前にあることを少しでもまちな方向にもつていこうと努力してきたつもりですが、あるいはそうした緩慢な災いを助長して

しまった面もあるのかもしれないと自問することもあります。

もちろん悪い変化ばかりではありません。幸いな変化の大きなものは国際化とオンライン化でしょう。かつては日本文学科と言えど日本人の学科でしたが、今では留学生がいるのは当たり前で、今年度の私のゼミは、日本を含めて4カ国の学生で成り立っています。

学会でも留学生が発表しない年はありません。私が事務局を務めた説話文学会の今年度の大会では、北京と東京・ソウルをリアルタイムで結び討論もありました。学会もコロナ禍で大きな打撃を受けましたが、おかげでオンライン化は進んだわけです。以前、この会報の五三号に「国際」の日常化」という小文を書いて、大学院ゼミをスカイプでやっていることを報告しましたが、それから三年も経たないうちに、今ではWebexやZoomを誰でも普通に使っています。「災いを誰でも普通に使っています」ということもあるわけです。

最後に卒業生の皆さん、私の最後の楽しみに、今後またまに付き合っていただければ、まことに幸いです。引き続きどうぞよろしく。

日本文学会春季大会

ご講演・佐伯眞一先生

「熊谷直実から何を学ぶか―敦盛最期の読み方―」

博士後期課程三年 武居 辰幸

二〇二二年六月五日（土）、青山学院大学日本文学大会春季大会が開催された。昨年に続くコロナ禍のため、今回もオンライン会議システムWebex Meetingsを利用して行われた大会には、現役の学生のみならず、卒業生を含む多くの参加者が画面を通してつながり、有意義な時間をともにした。

今大会では、本学日本文学科教授の佐伯眞一先生に「熊谷直実から何を学ぶか―敦盛最期の読み方―」と題してご講演いただいた。ここでは、中世文学、主に軍記物語を中心に、ご研究なさっている佐伯先生のご講演の一部を紹介したい。

『平家物語』『敦盛最期』は、武蔵の武士・熊谷直実が手柄を立てるため、一ノ谷合戦において、敵方の平敦盛を討つという内容だ。沖へ向けて馬を駆る敦盛を見つけ

難なく組み伏せたが、その将の兜を押しつけ敦盛の顔を目にした瞬間、我が子・直家と同じほどの年齢で容貌が美しい故に討つ気も失ってしまう。熊谷は助けようとして追いつめられ、前後不覚の体で敦盛を殺し、その首を取ったが、錦の袋に入った笛を見つけ、敦盛の高貴さへの敬意と討ったことへの悔恨を深くする。

ここまでは現在一般的な語り本系の覚一本に沿った内容だが、古態を多く残すとされている読み本系の延慶本では、熊谷の心の変化の様相は少し異なっているという。

延慶本では、熊谷の目にまず入ったのは、敦盛の美しさであった。次いで、我が子・直家と同じ十六歳であることを聞いたことで、敦盛を助けたいと思悩む。熊谷のような小身の武士は、手柄を立て

て得た所領を息子に継がせることを目的として戦っていた。今、目の前にいる敦盛にも自分と同じように息子を愛する父親がいると思ったことで、熊谷は敦盛を殺せなくなってしまったのだ。

その後の泣く泣く首を取るといふ展開は覚一本と同様だが、敦盛の年齢を知り、自分と同じような父親がいると思ったことが、直実の心の変化を生んだのであり、ここで重要なのは、相手が自分と同じ存在に見えた瞬間、敵を殺せなくなるという心理だったのではないかという。

続いて、『今昔物語集』から、男が妻のために雄鴨を殺したが、その夜、鳥の羽音に目を覚ますと、雌鳥が遺骸の前で泣き騒いでいるのを見てたちまち発心し出家したという説話から、獲物としてしか見ていなかった対象にも、自分と同じように家族を愛し、愛されている存在であることがわかった瞬間、自身の行為がいかに酷いものだったかがわかるのではないかと、『平家物語』『敦盛最期』との類似性をご説明いただいた。

さらに、「人が人を殺す時の狼狽について」として、他学の知見を

もとに、太古の昔に初めて人を殺した人間が、その時何を思ったのか、その人間の「狼狽」を想像することは人間を理解する上で有効であり、その後も人が人を殺すときには「狼狽」を伴っているはずで、この感覚は太古から現代まで、人間が抱き続けているものだということをお話いただいた。

相まみえて命のやりとりをすることなく、インターネットやSNSを通し、悪意に満ちた言葉一つで、ときにはその後に起き得ることを意識しないままに放った「狼狽」なき一言で、一人の人間を死に追いやることができるようになってしまった現代。この時代を生きている我々は、敦盛を前にした熊谷が抱いた心の葛藤が意味するものを、今一度考えるべきではないだろうか。

「我々は人を殺したことはなくても、人を殺す人の心を想像することはできる。その方法を教えてくれるのが学問・研究なのだ」という先生のお言葉、そして今回ご教示いただいたご研究の一端から、作品に向き合い、人の心の機微を読み解く力を養うことの必要性とその意義について学んだ。

春季大会研究発表

国見歌試論

博士前期課程二年 西澤 駿介

二〇二二年六月五日(土)に、青山学院大学日本文学会春季大会において、「国見歌試論——『古事記』四十一番・五十三番における〈政治の詩学〉——」と題して研究発表を行いました。

国見歌とは、高所に登り立ち、眼下に広がる国土を望見して詠んだ歌のことを指します。この国見という行為は、日本のみならず、『毛詩』や『楚辞』などの古代の中国詩歌にも見ることが出来ます。

春季大会では、『古事記』に見える国見歌、その中でも四十一番歌謡と五十三番歌謡を中心に発表を行いました。前者は応神天皇が、後者は仁徳天皇が詠んだ歌です。そして、いずれも「……見れば……見ゆ」という形式で歌われています。これまで、この型を持つ歌は、天皇の資格に関わる表現であると解釈をされてきました。しかしそうであるならば、『古事記』

に登場するすべての天皇が、「……見れば……見ゆ」という型を持った国見歌を歌っていなければならぬはずですが、けれども、この型を詠んだ天皇は、上記の応神天皇と仁徳天皇だけです。それではなぜ彼らだけが、この型を詠んだのでしょうか。

これまで、独立歌謡や物語歌など『古事記』の文脈における齟齬の問題等を中心に、二つの歌は解釈をされてきました。発表では、これらの歌を再度『古事記』の文脈に戻し、それぞれの歌の解釈を検討していきました。その際、単に前後の文脈から当該歌を解釈することはせず、仲哀記まで射程を伸ばして検討をしていきました。というのも、仲哀記には「……見れば……見ゆ」に類似した「……見れば……見えず」という表現があるからです。こうした類似が単なる偶然ではなく相関関係にある

ことを、仲哀記と天照大御神との関係や「……見れば……見えず」が『日本書紀』にはない『古事記』独自の表現であることなど、様々な角度から分析していきました。

その詳細については、『青山語文』第五十二号に譲りたいと思いますが、仲哀記の「……見れば……見えず」と口にした仲哀天皇が崩御する原因として天照大御神の「御心」に疑問を持ったことを踏まえながら、この「……見れば……見ゆ」という国見歌にも、天照大御神の「御心」が込められた政治的な表現であることを指摘しました。こうした歌による政治性は、個々の歌の表現にもあらわれていること、すなわち二つの歌に見えている景が、王化の範囲、さらに言えば「小帝国」の達成に通じていることを論証しました。この「……見れば……見ゆ」という国見歌が、応神天皇と仁徳天皇にのみが用いられているのも、こうした「小帝国」の達成を歌によって描くためであると結論づけました。

昨年の二〇二〇年度は、新型コロナウイルスの感染拡大のため、春季大会は見送られました。今年度はオンライン会議システム

在学生より

コロナ禍の大学生活

「コロナ禍の楽しさ」

三年 安藤 絵理

今年でコロナ二年目に突入した。

コロナ一年目の二年生はオンライン授業で一年が終わり、コロナ二年目の三年生の春に、ようやく二週間だけ対面授業が再開できた。一年以上りに友人に会ったその時の嬉しさといったら！

しかし、その嬉しさもつかの間、また緊急事態宣言に。

何とも先の見えない世の中で、緊急事態宣言も、また延長、引込んだりもまたいつ出されるのやら。一か月後が、オンラインか対面授業かも、わからない。一寸先は闇。最近では、闇の中でも、楽しんだもの勝ちだと、コロナ二年目

にして、楽しみを考える余裕も少し出てきた。ここでは、暗いことを書いているとお互い気が滅入ってしまうかもしれないので、コロナ禍の私の楽しみについて書こうと思う。

私のコロナ禍での楽しみは、読書とピアノだ。どちらも家で一人で楽しめることがメリットである。受験期に本から離れてしまつて、二、三年くらいあまり読書をしなかったが、家にいる時間が長くなったのを期に、読書を少しずつ再開させた。私の好きな本のジャンルはエッセイで、田辺聖子の『楽老抄』が一番好きである。

最近では、森博嗣のエッセイにハマっている。『道なき未知』は面白い。自分のこれからの人生について考える良い機会になった。また、日常の時間の使い方についても書かれており、課題などの締め切りに追われがちな私にとっても刺さった。同著者の、『夢のかなえ方を知っていますか?』という本も読んだが、現在就活をしている者として、得るものが多く、仕事以外の自分の「夢」を思い出すことができた。そして、「夢」はそのまま持つていてよい、というこ

とを教えてもらった。もしこれを読んでいる人の中で、就活で暗中模索になっている人がいたら、ぜひこの本を手にとってみてほしい。

もう一つの楽しみである、ピアノでは、現在、シヨパンの『別れの曲』と『軍隊ポロネーズ』を練習している。ただたどしいながらも、自分の内面を、曲を通して表現するのは楽しい。

最近気づいたのは、私のピアノを弾く原動力は本である、ということだ。『ピアノの森』や『だめカンタービレ』を読んでは、ピアノを弾き、読んでは、弾き、を繰り返している。この、練習がはかどるループの大発見のおかげで、今までよりもピアノを楽しむことができるようになった。

ピアノというものは不思議で、毎日音が変わる。自分の体調や気分、ピアノの調子、天気、湿度によつて音が左右されるのだ。例えば、晴天の日は、カラツとした音を出し、雨の日は少しくぐもつた音を出す。かと思えば、雨の日でも調子のいいときもある。そして、毎日弾き続けることで、ピアノの音色が育つてゆく。ピアノを弾い

ていると、日々の少しの積み重ねがとても大事なのだと、長年の練習不足を痛感しながらつくづく思うのだ。

さて、私のコロナ禍の主な楽しみにについてはここまでにしよう。

コロナが流行り始めた去年は、何をすればよいか分からず、立ち止まることも多かった気がする。しかし、今年はコロナ禍でも楽しみを見つけられるようになったことは、自分にとって大きな成長だったと思う。このまま先が不透明な世の中が続くとしても、新たな楽しみを逞しく見つけられるようにしたい。

「視方を変える」

三年 伊藤 諒

この文章を書いているまだ暑苦しい九月の末頃。最近しばらくぶりに大学へ向かった。定期券は春にかけて六ヶ月分購入したものの、その路線に乗ったのは数えられるほどではないだろうか。度重なる緊急事態宣言の中で我々学生はよもやキャンパスの形もおぼろ

げにさえなつていくような感覚がある。後期の授業が始まつて校舎の形も、友達付き合いの形も思い出せるのであろうか、期待と不安を抱えて後期授業が始まる。

しかし、今回私が言いたいことはコロナに対する愚痴や怨念の類ではない。それどころか、このコロナ禍を悪いことのようにとらえがちな世界に対して新しい視点を提供する為のものであることを理解していただきたい。

文学部日本文学科に入つて3年目になる。文学部に入つて気づいたことは、学問の本質とは物事を別の角度からとらえることだということである。なので私もまた、コロナという病理を肯定的な視点でとらえることが出来るのではないかと考えている。

そもそも、コロナは大学生にとつて苦難を与えるディザスターである。一人暮らしの人にとつては、わざわざ借りた家に引きこもらされている。恋人と共に受験し、ともにキャンパスに通うことを夢見た人は会うことすらもままならなくなつたであろう。論文をキャンパスに取りに行くこともむずかしく、ゼミナールでは交流の食事

会がないので顔と名前だけが一致するようになった。私も幾度か自分の現状を自嘲気味に「オンラインサロンの学生」や「大学生という肩書だけのフリーター」と揶揄したこともある。いいことと悪いことを天秤にかけてみれば間違いなくこれはマイナスなことばかりだったであろう。

しかし、もしコロナでなければこんなことも起こらなかったであろうという現実が今自分の前に広がっていることも事実だ。まず、毎晩夜遅くまで働いていた父がリモートワークで在宅するようになった。私もまたアルバイトが減り、サークルも活動がなくなり、夕飯の時間には家にいるようになった。その結果、各々時間があるときに食べるというバラバラだった我が家の食卓が気づけば全員で囲う食卓に変わっていた。さらに、通学という不便な時間がなくなり有効活用できるようになった。直前まで寝られるので睡眠不足からも脱することが出来た。交友費の代わりに趣味にパソコンを使うようになった結果パソコンのモニターは三枚になった。

人間という生命体はつくづくし

ぶとい生命体なのだ実感する。押し込められても閉じ込められても絶望しても、どこかに光を見つけ、どこかに楽しみを見つけ、どこかで自らを助けようともかくここが出来ようになる。だから今度はまた制限ばかりのキャンパス生活に慣れていくことになる。その時もきつともかくことが出来る。そう信じて私は定期券を六ヶ月分買うことにする。



「当たり前前に 生きるために」

三年 江夏萌々子

「人に会った回数」を数えたのは初めてです。ましてその単位が「何か月に何回」。大学2年コロナ1年目、私は九州から上京して一人暮らしも2年目でした。1年の春休みは今では信じられないけれど、友人と（コロナウイルスの足音が聞こえる中でしたが）海外旅行にも行き、実家にも帰っていました。しかし実家から東京に戻った2月から、ほとんど誰とも対面で会わない日々が始まりました。

あつという間に緊急事態宣言が発令され、友人と会うどころか一人での外出もためらうようになりました。アルバイト先だったレストランも、デイナードがメインあったこともあり、ほとんどシフトに入れず辞めざるを得ませんでした。学校の完全オンライン授業も決定。近所に知り合いはいないし、この状況の中で友人を遊びに誘うような勇氣はありません。そこから半年の間に、スーパーやコンビニの店員さん以外に対面で人と会ったのは3回です。2回は単発で就業したアルバイト先の同僚と。もう1回は、東京に住む親戚が私の二十歳の誕生日でご飯に連れて行ってくれたとき。5か月で3回。数えて、覚えていられる数でした。

私はもともと友人は多くないし、一人の時間を存分に楽しめる方です。実際家にこもる間もパンを焼いてみたり、漫画を一气読みしたり、おうち時間を満喫したと思っっています。同じような状況の友人と何時間も電話をつなぎっぱなしにする日も多くありました。しかし平気だと思っけても、それでもゆつくりと「生活」という

営みが脆くなつていつていたのだと思えます。ご飯を食べるのが億劫な日が出てきました。だんだん眠りにつくのが下手になって、なんとなく課題の提出が鈍くなりました。学費を出してくれている親には本当に申し訳ないけれど、落としてしまった単位もあります。普通の「生活」とは、人や社会とつながった骨組みを基礎に、塗り固められたものだったのだと気が付いたのは、後期に入ってから家に帰ってからです。決まった時間に起きて、ご飯を食べて、何気なくいろんな人としゃべることが、こんなに私の人生に大切なことだとは思いませんでした。

旧来の日常が戻りつつあるとはいえ、今も家で一人で過ごす時間は多くあります。それでも私は「普通」に生活しようとして少し頑張るようになって、ずいぶん楽になりました。大学の授業も、対面で受けられるものならできるだけそうしたいと思えます。「当たり前前」の構成要素とそれを維持するための小さな努力を発見できたことが、このコロナ禍で一番の私の収穫でした。

就職活動体験記

「私の魅力、伝わらんやつに用はない！」

四年 大村まなみ

世に言う「就職活動」なるものが、現実的な脅威として私の前に立ち上がったのは、大学四年の春のことだった。インターンシップが大体三年の夏に集中することを考えると、だいぶのんびりしていた方だろう。それもこれも感染症による自粛生活の影響である、というところもかとも感染症のせいにしすぎだと感じられるだろうか。しかし、キャンパスという重要な情報収集の場を失い、同じ就活生の状況を知ることができなかつたために、必要以上に心配してしまう人や、反対に楽観視しすぎてしまった私のような就活生は案外多いのではなからうか。そんな私も九月の初めには就職活動を終え、恐れ多くもこうして体験記を書かせてもらっている。体験記の執筆、ましてや後輩へのアドバイスなんてものを私なんかが、と思いましたが、就活に関する情報

を些細なものでも切実に求めていた自分の自分が浮かんできて、了承することにした。私の経験が、いつか必要とする人ののもとに、必要とするときに届くことを祈って筆をとる。

さて、就職活動とは選考の繰り返しである。何度も選考を受けていると、自分が何者なのか説明するように求められていると感じることがあるかもしれない。そして、選考に落ちることが、すなわち自らの否定だと感じられることもあるだろう。所謂「お祈りメール」を何通ももらうと、社会から受け入れられていないような気すらするかもしれない。

しかし、そんなことはない。本当にない。無事に就活を終えたやつにはわからんだろうよ、と思う人もいるかもしれない。それは、まあ、確かにそうなのだが、でも本当にそんなことはないのだ。まず、自分が何者なのか、そんなことをはつきりさせる必要はない。選考がどのように行われているのか、一学生の私にはわからないが、恐らく企業は様々な基準でもって学生を見ている。いくら優秀でも社風に合わないと思えば選ばない

だろうし、また優秀さを感じるポイントには人によって、また企業によっても違うだろう。つまり、選考に落ちるというのは「落第」というより、正しくは「条件に合わなかつた」ということなのだと思ふ。だから世にある数十社の企業の条件に合わなくても、それは社会からの拒絶ではないし、あなたを否定するものではない。

就活が長引き、持久戦になったときに大切なのは、自分が頑張れる方法を知ることだ。常に全力でいる必要はない。折れずにいるために、自分に合った気持ちの保ち方を、就活を機に掴んでほしい。私は就活中、お祈りメールをもらうたびに、「私に合わなかつただけ」と言い聞かせてきた。二次面接を通過し、最終面接前の性格適性検査で落とされたときも同じように唱えた。いま振り返ってみても、それは間違っていないかと思う。

これを読むあなたが、来たる就活の際、見る目のない数多の企業を蹴散らして、本当にあなたが輝ける場所にたどり着けるよう、切に祈っている。

大学院に進学して

博士前期課程 内野 晴菜

入構制限がかけられた状態で三月にひっそりと行われた大学の卒業式典から、早くも六か月が経過したことに驚きを感じつつも、本学の文学研究科の一員に加わることに出来た喜びを実感しています。学部生として四年間を過ごした大学と、今年度から足を踏み入れた青山学院大学とは、通学路も学内の施設も学生も、当然ながら雰囲気も全く異なり、慣れるまで肩の力が抜けずにいましたが、先生方をはじめとした皆様にあたたかく迎えていただき、今では充実した大学院生活を送ることができています。入学式後に行われたオリエンテーションの際、大屋先生からお言葉を頂きましたが、その中で「自分の研究したいことや興味のあるテーマをいつも頭の片隅に入れて置き、日々の小さな気づきの中からきっかけを得て研究を拡大していくこと」のお話がとても印象深く、今でも心に残っています。学部生の時には、必要時にだけ研究のことに意識を集中さ

していききたいと思います。

卒業生より

「なるようになる

〜ケセラセラ〜」

阿部 優香

せて短期的に勉強するというのが主でしたが、これからは常にアンテナを張っておき、長期的な目で見て少しずつ研究を結実させていきたいと考えを改めるようになりました。今年度は私を含めて六名の学生が文学研究科日本語・日本文学専攻の博士前期課程に進学し、院生部会の役員決めなどを通して、少しばかり交流する機会を頂きました。入学式の日にはマスク姿だったため、オンラインの会議で初めて顔を合わせることとなり、それぞれの分野・領域で研究に励んでいることを知ることができました。また、博士後期課程で研究を続けていらっしやる先輩方とも交流し、身の引き締まる思いが致しました。研究の分野・領域は異なりますが、それゆえに授業内の議論では多角的な視点からの意見を聞くことができ、様々な刺激を得られるため、自身の見識の幅を広げる契機となっています。とはいえ、まだまだ知識不足のために日々の勉強に手いっぱい、瞬く間に二年間が過ぎ去ってしまふような予感がしておりますが、学問を追求できることの喜びを忘れることなく、時間を大切に邁進

大学四年生になる春、何の準備もしないまま私は就活生になりました。何か行動しなければと考え、とりあえず書いたエントリーシートを大学の進路・就職センターに持ち込み、添削していただきました。この時点で周囲より何テンポも遅れている状態で、本来ならば危機感を覚えるべきところでしたが、不思議とそんなに焦りはなかったです。なぜなら、両親が「今年上手くいかなければ、また来年頑張れば良いよ。自分のペースで進むことが大切だよ。」と言ってくれていたからです。気持ちが沈みがちな時期に、私の心が軽くなるよう気遣ってくれた両親には感謝しています。なるようになる、

と自分の気持ちを切り替えるきっかけにもなりました。また、就活を通じて自分自身を見つめ直し、長所と短所を受け止めることで、自分がその会社にどう貢献しているかを、伝えることができました。初めは上手くいかずに落ち込むこともありましたが、両親の言葉や、同じように頑張っている友人たちとの励まし合いもあり、めげずに続けることができました。その後、内定をもらった金融機関で、私は今働いています。会社の方々が優しく、非常に雰囲気の良い職場なので、素の自分で毎日楽しく働いています。まだ二年目なので覚えることは沢山ありますが、新たに知識が増えた時や成果が出た時に喜びを感じられる仕事なので今後も努力し、より成長したいと前向きな気持ちでいられます。

就活を終えて大切だと感じたことは二つあります。一つ目は学科試験やエントリーシートの早めの対策です。先程も書いたように、私は事前にできる準備をしていなかったため、全ての進みが遅くなってしまうました。決して楽しいことではないので後回しにしたくなりますが、将来の自分が助かると思っただけでコツコツ取り組んでいくことが大切です。二つ目は、面接は相手との会話であると意識することです。考えてきた内容を完璧に伝えようとするあまり、一方的に話すだけになってしまうことが多いです。用意した台本を丸暗記するのではなく、その場に合わせ、話し内容を捨選択するなど臨機応変に対応することが大切です。そうすることで、自分のアピールポイントだけでなく、人柄や雰囲気も併せて伝えられるため、より自分に合った就職先を見つけることができると思います。とはいえ、どんな仕事に就いても多少の大変なことはあります。そんな時は割り切って、仕事のことを一瞬忘れて、家に帰ったらこれをしよう、今週頑張れば楽しみな予定がある、と楽しいことを考えてみてください。きつと乗り切ることができるはずですよ。

最後になりますが、大学生活は思い切り楽しんでください。時間がたつぷりあるのは今だけです。遊び、サークル、アルバイトと予定をいっぱい詰めて、時には就活

の準備をして、一度きりの人生自分が納得いく未来を掴み取ってほしいです。

「大人になんて

なりたくない」

荒川 美咲

いつの間にか夢を諦めて、楽なほうへ生きる生き方を身につけてしまった。幼いころは誰よりその夢に対して執着していたはずなのに、今ではそれを諦めてでもいかに楽するかを考えている。

好きなことを仕事にするということは、それを嫌いになるリスクを負うことだと知った。だからといって、夢を見ていたころの自分であれば、諦めるなんてことはしなかったことも、嫌いになりたくなくて「じゃあやめよう」「好きなことは趣味のままでもいいや」と思うようになっていった。

夢追い人が心底羨ましい。苦勞しても、それを好きでい続けられることも、何度でも頑張ろうと思えることも、折れそうな時、好きなことだからと夢が見続けられる

ことも、決して嫌みではなく、本気で羨ましいのだ。

私は何になりたかったのだろう。たくさんあったはずなのに、できない理由を並べるようになってしまった。昔の私が見たら、なんて言うだろうか。情けないなんて言われてしまうだろうか。

夢を諦めて楽に生きて行くことを選ぶようになったのは、大人になったということだろうか。

「お前ももう少し大人になつたらわかるよ。」上司に言われた言葉。大人になるとはどういうことなのだろう。大人になるとは「いろんなことを諦める」ことだと言われているような気がしてならない。大人になって、何かを諦めるようになったら分かるようなことなんて分からなくていい。諦めることが大人になることなら、大人になんてならなくても良いではないか。諦念の生み出す哀愁があるだけで、大人なんて別にかっこよくないし、なによりつまらない。丸くなる必要なんてない。

でもきつと、大人はみんな人生がつらくて、諦めることでしか、自分を守っていけないのだとも思う。だから「大人」にならざるを

得ないのだ。私も、いつか上司の言う「角の取れた大人」になってしまうのだろうか。嫌だな、と思った。だってそんなの全然かっこよくないのだ。私はやっぱり、大人になんてなりたくない。

大人になってみて、大人になりたくないと思った。子供の頃、あんなに早く大人になりたかったのに、大人とは実につまらない。何者かに角を取られないように今日も私は心の中で大人達に「うるせえ、ばーか」を連呼しながら、大人になることから逃げている。まだ私は夢が見たかった。今からでも見られるだろうか。かっこいいところなんて何もないけれど二十半ばになってもこんな風に思っている大人がいることを覚えておいてほしい。

「思いつくままに」

神田 秀美

大学生とは、お金があつて自由に遊べる存在だと思つて、さあ自由な大学生になるぞ、と思つていた矢先、高校二年生のときにバブ

ルが崩壊した。

諦めなければ夢は叶う、とはよく言われるものの、夢を叶えられる人間はそれほど多くはない。と思う。夢が叶わなくても生きていかなくてもいいけない、そして、人生は意外と長い。大変だ。

いろいろな場面で引き合いに出されるPDCAサイクルが苦手だ。PLAN→DO→CHECK→ACTIONのサイクルが効率的に目標達成へと導くのだという。セルフマネジメントのひとつの形だそうだが、私にはマネジメントというよりはむしろ何か外からの力に意識をコントロールされているように感じてしまう。物事の進行、人の考えることや感情はそんなに直線的なものではないと思う。紆余曲折、行きつ戻りつ。そんなことのは繰り返してある。それは無駄なことなのか。最短距離、最短時間で目標に到達することが善なのか。そして、目標に到達しないことは駄目なことなのか。

バブル崩壊、夢は叶わず、現在はセルフマネジメント、セルフチェック、自己責任の嵐。「U」の大きな波。窮屈、不自由を感じることは多い。

「自由な大学生になるぞ」というのが打ち砕かれたと感じながら始まった大学生活。けれども、大学で学ぶ内容や学ぶことそのものは自由だった気がする。

プロクルステスのベッドについて教えてくれた先生のところにカラスの撃退法について話をしにいった。講義中に「五輪の塔はおでんの具」と先生が言って友人と共にびっくりした。出発点の発想は斬新すぎるほど斬新だけれど、それが見事に論文に昇華する。中国語を授業で四年間学んだ。音楽のように話す中国語が好きだった。「中国語上級」はあわや単位を落とすところだった。今や片言もままならないが。指導の先生から「君は最良の材料を最悪に調理している」と言われた。はじめはショックだった。ただうすうす感づいていた。「最良の材料」は選べたのだとそれを自分で勝手に評価した。先生はそうなると分かっていたけれど、最初は自由に調理させてくれたのだった。その後、先生が苦勞したのはいうまでもない。私は論理にかなりの飛躍があるらしい。

学ぶ場所は自由な雰囲気包ま

れていた。いつまでもそんな場所があつてほしいし、そこでは自由な人がたくさんいればいいなと思う。どんなに窮屈な状況でも考えたり、感じたりすることは自由だ。何気ない小さな嬉しいことは最短距離の行程では出会えないかもしれないし、効率主義からすれば「ムダ」なことが本当にそうなのかは分からない。もし、今何かに躓いている人がいたとしても、それはもしかしたら、ものすごい転換点の途中なのかもしれない。

「新たなステージへ」

惣田紗莉渚

私は現在、舞台のお仕事を中心に、女優、タレントとして活動しています。大学在学中は、SKE48という名古屋が拠点のアイドルグループに所属していたので、大学の授業を三限まで受講し、新幹線で名古屋行き劇場公演（名古屋の栄にあるSKE48劇場でほぼ毎日公演が行われていました）に出演するというような生活で、休学期間を含めて卒業まで八

年間もかかってしまいました。在学中は、日本文学科の先生方を中心にたくさんの方々に支えていただき、二〇二〇年に無事大学を卒業することができました。

アイドル活動を始める前から舞台女優になりたいという夢があり、活動を始めて六年目の二〇一九年に、新橋演舞場・大阪松竹座で行われた「トリツパー遊園地」という作品で幸運にも大役ををいただき、二〇二一年には「未来記の番人」という作品でヒロインをさせていただきました。舞台

生きることのできる生活が私にとってはずごく幸せで、毎日が充実しています。応援してくださるファンの方の存在も本当に大きく、アイドル活動や大学生活で学んだことが、今の私を支えてくれているのだと、感謝の気持ちでいっぱいです。

二〇二二年春には新橋演舞場、御園座、大阪松竹座で、藤原紀香さん、久本雅美さんの主演舞臺「毒薬と老嬢」に出演させていただきました。（歌舞伎・演劇の世界―松竹株式会社（shochiku.co.jp））初めての海外作品なので、今までと違った表現ができるよう、成長していきたいらと思えます。台本を読むときに、日本文学科で学んだことが活かせると思うので、もし行き詰ったときはお世話になった先生方に相談してみようと思いません。

今後も、いくつになっても夢に向かって歩んでいける、そんな人生にしていけたらと思っています。（二〇二一年十月筆）
惣田紗莉渚ホームページ
(<http://sodasarina.com>)

長年在籍したグループを離れ一人でやっていくことは本当に不安でしたが、やりたいことに正直に

「学生時代に読んだ

小説のこと」

中村絵理子

「若いうちにたくさん本を読みましよう」とは、とてもよくいわれていることです。私は多読家ではありませんが、最近になって、学生時代に読んだ本のひとつひとつが心の底で生きていると感じることがあり、日本文学科に在籍してよかったですと思うようになりました。

学生時代は、片山宏行先生の近代日本文学のゼミに所属していて、興味のあるものから、自分では手に取らないだろうというもので、多くの小説を読みました。その時の小説の設定や登場人物たちが、自分の心の中に深く記憶されていることに気づいたのは、30歳を過ぎたあたりからです。

ある日、暗い気持ちでぼんやりと青山のあたりを歩いていたことがあります。すると、青い服の美人とすれ違いました。咄嗟に、え？今のは高本さん？ロビンズ・ネストはどこ？とあたりを見回

し、しばらくして、学生の時に読

んですっかり忘れていた『国境の南、太陽の西』の設定であることに気づきました。そして、この本に出てくるイズミや有紀子の人生とその感情に思いを巡らせたり「プリテンド」のメロディを思い出しているうちに、物語の細部まで記憶していることが嬉しくなつて、気持ち晴れた気がしました。

他にもあります。不条理な要求ばかりするクライアントにうんざりしていた時、その方が大森の輸入住宅に住み、ペットを飼っていると知りました。すると記憶の彼方から『痴人の愛』の河合譲治がやってきて、本当に動物ですか？ナオミという人間では？と想像しているうちにだんだん愉快になつてきて、この人も人に言えない苦悩があるにちがいない。とおおらかな気持ちを持てるようになりました。

物語を読むと、そこに描かれた人生や苦悩を追体験することができます。そして入り込むほど心に深く刻まれ、すっかり忘れた頃に記憶から飛び出してきて、自分を驚かせたり楽しませたりしてくれます。

もちろん、大人になった今でも

本を読みますが、どうしたわけか、学生の時のように新鮮な気持ちで、感情の輪郭をなぞるように鮮明にイメージしながら、深く入り込めることは多くありません。

苦悩、嫉妬、自己嫌悪、喜び：日常の中で、多くの感情は単体でなく、細分化され、複雑に入り混じって存在します。自分一人の人生だけであらゆる組み合わせを経験するには限りがあります。たとえ無自覚だったとしても、若いうちにたくさんの喜怒哀楽とその組み合わせを心にストックしておくと、ずっと後になって設定が合致して、急に役立つことがあるようです。読んだ時だけでなく、10年以上経つても影響を与えてくれるような読書を、もう一度してみたいと願っています。

「無常」

鮑ホウ 夢南ムナン

苗字が高級食材っぽい鮑（ホウ）です。エッセイ執筆のご依頼を頂いて、後輩の皆さんに価値のある

アドバイスをしようと真剣に考えましたが、やはり大学卒業後にも実感していることの話をさせていただきます。

私は非典型的な学生、あるいは典型的な問題の多い学生でした。一年生の頃、日本文学への興味が強く感じながらも、満員電車に乗るのが苦痛で不登校気味になり、その年は履修登録した授業の四分の一しか単位が取れませんでした。その衝撃で、二年目と三年目は自分なりに努力して、四年で卒業できそうなペースには上がりましたが、健康問題でやむを得ず、卒業を遅らせることになりました。そしてようやく卒業が見えてきた時、夢である日中通訳翻訳者になろうと就職活動をしましたが、途中でアニメの字幕翻訳を研究したいと思いました。今は他大、学大学院の日中通訳翻訳専攻で、この分野の研究をしながら通訳翻訳の実務訓練を受けています。

コロナ禍という予想不能な事態に、まさに無常を感じました。食事会や飲み会の自粛はもちろん、授業と行事がオンラインなることもあり、昔みたい日常を取り戻したい学生の方が多くいると思

ます。私も普通に戻りたいと切に思いますが、コロナ禍前の、自分の大学生活を思い出すと、楽しさばかりではなかった。大学で友達ができたとときの嬉しさ、授業で知恵が身についた時の達成感だけではなく、みんなが普通に出来ることを出来なかったことへの悔しさも経験しました。前向きに考えようとしても、それが自己欺瞞だと感じる瞬間さえありました。

それでも無常ということだけが常である。順風満帆が永遠に続くわけがないように、苦境も永遠ではない。こんなアドバイスをもらったことは何度もありますが、一度経験しないと本当にそうだと思えません。周りの人よりスピードが遅いなら、自分のスピードで前に進む。壁にぶつかったら、出来ることから少しずつ積み重ねる。疲れ切ったら、無為自然になって力を蓄える。こうやって気がつけば一筋の光が見えてきました。

私は大学卒業後、日本文学と違う分野に進みましたが、大学で学んだ日本文学・日本語の知識と感性が今の分野にも大きく役立っていることをよく実感しています。

そしてなにより、青学日文で培った学問に対する探究心が、無常な世の中で一つ確かなものを示してくれたと感じています。皆さんもきっと、大学で多くの知識と経験を身につけると思いますが、それぞれの光を道標にして、無常を生き抜いてください。そして、明けぬ夜はないと、応援のメッセージを送りたいと思います。

「印象的な言葉」

帆苺 基生

2021年4月から弘前大学教育学部国語教育講座で日本近現代文学担当の教員として働いています。青山の日文に入学してから、その後大学院に進学し、高等部や大学で非常勤講師をさせてもらったりと、ずっと青山キャンパス周辺を拠点にしていた私にとって、弘前に行くことは大きな変化になりました。

文学の面白さにはまって勉強を始めたら、どんどん沼にはまっていき、そのまま勉強を続けていたら、今こうして文学を研究し、そ

れを教えることが、仕事になっています。特別優秀だったわけでもないし、いわゆる気鋭の研究者というわけでもないと思います。ただ、いろいろな（ご縁）とそこから生まれる（流れ）のようなものに身をまかせて、その時その時のできることをやってきた、そうすると気がついたら今、弘前の個人研究室でこの文章を書いています。

そんな私自身の今を肯定してくれているように思う、二人の先生からももらった印象的な言葉があります。

もうずいぶん前のことなので、片山先生自身は覚えていらつしやらないかもしれませんが、まだ大学生の時だったか大学院に進学した直後だったかと思います。何人かで片山先生と雑談していた時に、少子化が進み大学もどんどん縮小していく状況の中、いわゆるアカデミックポストといわれる大学等に就職するのがどんどん難しくなっているという話が出てきました。そんな時片山先生がおっしゃったのは「確かに簡単にじゃない。だけけどチャンスがないわけではないから、大事なのはチャン

スが回ってきたときに、それに手を伸ばせるところにいられるように努力をし続けること」というようなことだったと思います。先生のこの言葉が頭の中に常にあつた。だから好きなことをずっと勉強し続けられたのだと思います。

もう一つは弘前に行くことが決まったと報告したときの佐藤先生からの言葉です。「たいへんめでたい」というお祝いに添えられていたのは、「献身的な姿勢をちゃんと見ている人がいて無駄にはならなかったですね」というものでした。意識して「献身的」であらうとした訳ではありませんが、ただいろいろとお声がけいたただくのを、ありがたいことだと思って、都合がつく限り応えるようにしていました。そうしたらいろいろな（ご縁）が生まれ、結果的にそれが私自身の（業績）にもなっていました。佐藤先生の言葉から、目の前の損得勘定や自分の利益だけで動かなかつたことが、結果的に自分自身をも支えていたんだなと思えました。

先生方の言葉は、今私自身がここにこうしている、その歩みを肯定してくれるように思うもの

だからこそ印象深く残っているのだと思います。これからも一つ一つの物事や、一人一人の出会いを大切に、向き合っていきたいと思っています。

留学生の動向

准教授 韓 京子

二〇二一年度の日本文学科在籍中の留学生（私費）は三十三名です。新入生は七名で、韓国、中国からそれぞれ二名と五名。大学院は博士前期・後期・科目等履修生として在学中の留学生数は六名で、博士前期（私費）二名、博士前期（国費）一名、博士後期（私費）二名、科目等履修生（国費）一名が在籍しています。ただ去年同様、コロナ禍の入国規制により来日できなかった学生もいます。緊急事態宣言解除後、後期の授業が対面で行われているなか、一人だけオンラインで参加していました。来年こそ全員希望通りにキャンパスでの留学生活が楽しめるようになっただけしてほしいと思っています。

佐伯真一先生の後を引き継ぎ、留学生担当教員とはなりましたが、四月の段階ではコロナ感染者数も減少しておらず、教員や日本人学生との対面の機会も設けられないままだったので、非常に申し訳なく思っていました。通常、年に二度の文化交流活動を行うことになっていますが、去年から一度も実施できておらず、先も見通せないでいました。そういったなか、九月に入り奇跡的に感染者数が激減した状況が続いたので、十一月七日、留学生文化交流活動として、学校近辺の散策を企画、実行することができました。教員四名、チューター二名、留学生九名が参加し、青山霊園・善光寺別院・明治神宮をめぐりました。青山霊園では青山学院関連の外国人宣教師や教員のお墓、国木田独歩、志賀直哉など日本近代作家、朝鮮の近代化に努めた金玉均のお墓をお参りしました。（写真は青山霊園でのものです）明治神宮では、七五三詣や神前結婚式も行われており、留学生は日本人の通過儀礼を実際見ることができたと、喜んでいました。

これまでの「会報」をふりかえっ

てみると、「留学生の動向」は五二号から始まったもので、佐伯先生が執筆されてきました。佐伯先生は、留学生一年生を対象とした「日本文化文学入門」授業も担当されており、留学生にとってはじめて長く会話することができた先生でした。なので、佐伯先生が今年度でご退任されるのを、留学生は非常に名残惜しく思っていました。三年生の韓みんひーさんは「留学生にとっての佐伯先生は「日本文学の道しるべ」的存在であると言っていました。実を射た表現です。

最後にチューターの紹介をした



と思います。留学生をサポートする上級生であるチューターは、例年より人数が減り、二年生の高野椰さんと藤本まどかさんの二人が努めてくれました。高野椰さんは、「コロナ禍の影響で、留学生の方と交流することが難しかったです。ですがそんな中行われたコーヒーマーケティングや文学散歩はとても貴重な経験となりました。人との縁の大切さを改めて学んだ一年間でした。」と感想を語ってくれました。また、藤本まどかさんも「一年間、非常に良い経験になりました。サポートする立場ではありながら、活動を通して多くのことを学びました。また、コロナで人との交流が減る中で、多くの人と出会えるきっかけができて、とても楽しかったです！」と語っています。最初の履修登録のサポートや交流活動など、留学生が大学に適應するためにチューターは欠かせない存在です。関心のある学生はぜひやってみてください。

院生部会報告

博士後期課程二年 天野 早紀

院生部会では、第一に本年度最も大きな出来事として、部会で編集・発行を行う査読論文誌『緑岡詞林・青山学院大学院日本語文論考』の制度改革を行った。

これまで本誌では、二月中旬を投稿締切とし翌年度五月刊行としていた。しかし、年度を跨いで行う編集作業及び引継ぎ等の事務手続きには、運営上困難が多かった。そこで、二〇二一年度からは一月中旬を投稿締切とし、編集作業及び刊行までを年度内三月中に終えることとし、精神的な余裕を持ったスケジュールと組織運営を期すこととなった。

また同時に、刊行に関わる会計運営制度の見直しも行った。まず、院生部会員の年度会費を新設し財源の安定を図ること、さらにこれまで貯蓄してきた予備資金の運用を開始することとし、これらによつて執筆費等の投稿者の個人負担を削減することとした。本年度のこの取り組みを契機とし、今後

も、部会員・執筆者・編集委員が安心して論文を発表することのできる環境作りに邁進し、研究活動の重要な一つとしての本誌の活気を、より一層強く確かなものとしていきたい。

なお『緑岡詞林』は、在籍中の院生をはじめとして大学院卒業生、本学文学部日本文学専攻教員及び教員や編集委員の推薦を受けた者（日本文学科学部生・卒業生など）からの投稿も歓迎している。日本文学部の査読論文誌『青山語文』のスケジュールとも時期が被らないため、論文投稿の一機会としてご検討の上、是非玉稿をお寄せ頂きたい。

また第二に、日常の研究活動の一環として、院生研究室のPCの買い替えを行った。現在院生研究室には四台のデスクトップPCがあるが、納期から八年経過したものを隔年で更新しており、本年度は一台がこれに該当した。最新機種の大らかな向上が見込まれる。本件のために機種選定・発注に関わることご助言を賜り、また常日頃から我々院生の研究活動をご支援下さる日本文学専攻教員各位、及び研究

支援助手各位に、心より感謝申し上げます。

総じて、安定した研究活動のための最重要課題はまず何より外的環境・制度の整備であることを、実感する年度となったように思う。本年度の改革整備が、将来何十年と経った暁に、盤石な礎となつていてることを切に願う。

今年度の学生の活躍

賞 藤本まどか（二年）

【第34回夕暮祭短歌大会（秦野市・秦野市教育委員会主催）】

◇寺尾登志賞 四宮伶（二年）

見えるまま描けばよいと聞いてから青色捨てた私だけの空

【杉原ウィーク2021・第22回杉原千畝記念短歌大会（岐阜県八百津町）】

◇奨励賞 大矢真里（二年）、田口陽香留（三年）

【短歌コンクール「八月の歌」(朝日新聞社主催、岐阜県高山市共催、高山市教育委員会後援)】

◇一般の部奨励賞 田口陽香留（三年）

【第15回全日本学生・ジュニア短歌大会（日本歌人クラブ主催、文化庁・毎日新聞社・東京都教育委員会後援）】

◇高校生・大学専門学生の部選者賞（藤原龍一郎賞） 小舟萩（三年）

最寄駅みたいな安心感なのだあな
たの纏う空気すべては

◇同選者賞（黒岩剛仁賞） 田口陽香留

自転車漕ぐ、もつと漕ぐ。風を切る、空を宇宙を、過去を振り切る
◇同秀作賞 朝原拓海（三年）

十二色ぜんぶ使って線を引く子どもに嫉妬している

◇同優良賞 松本のぞみ(三年)、三井らん(三年)

◇同奨励賞 牛山尚(三年)

【第15回「青山歌壇」(青山学院)】

◇最優秀賞 四宮伶(二年)

しゃぼん玉こちらに向けて吹く君は虹の向こうにいるみたいだった

◇理事長賞 朝原拓海(三年)

クレヨンで描いたものほど濃くもなく今日の虹にも目を細めている

◇大学長賞 古屋瑞久(三年)

帰り道白か黒かと考えるほどの答えは虹にまぎれて

◇優秀賞 松本のぞみ(三年)

《二〇一九年度》(学年は当時)

【第7回福岡女学院短歌コンクール】

◇一般の部 優秀賞 小舟萩(三年)

宙を掴み動きを止めたシヨベルカーあの日の僕と同じ背中だ

◇同入選 詩山智郎(四年)

【第26回「前田純孝賞」学生短歌コンクール(兵庫県新温泉町・新温泉町教育委員会・神戸新聞社主催)】

◇大学生の部 準前田純孝賞 加藤美帆(四年)

「悩むこと無い人だね」と古い師手相に本当の私はいない

◇同選者賞 小舟萩(三年) 目を開けたら世界に自分一人かも急いでシャンプール流し開ける目

◇同新温泉町長賞

福井花菜(二年)

息をするたびごとにペコペコするマスク人間もえら呼吸している

竹田菜純(三年)

どなかたの顔の形を記憶したマスクが踏まれる瞬間を見た

高橋佳奈(三年)

引越しは故郷が増えるという言葉葉胸に電車で新たな町へ

山田玲温(四年)

先輩のサッカーをみる特等席誰も知らない図書館の隅

◇同神戸新聞社賞 堀口元貴(四年)

君にあるB面みたいな雰囲気になるのだマスクをした顔が

◇同学校特別賞 青山学院大学

【第21回「若山牧水青春短歌大賞」(宮崎県延岡市主催)】

◇審査員特別賞 早稲田大学賞(坪内稔典選) 米子恵(三年)

シャンプールを変えるくらいじゃ変わらない自分のことが結構すぎた

同(永田和宏選) 竹田菜純(三年)

燃え盛るって柄じゃないよね私たち各駅停車の恋はじめます

◇佳作 笠川玲(二年)、横山友香(三年)

【名古屋短歌会館第14回短歌大会】

◇入賞 狩野祐輝(三年)

日本文学関係書籍

*二〇二〇年一月から二〇二一年一月までに出版された日本文学

専任教員(旧教員も含む)、日本文学科および大学院、日本文学・日本語専攻卒業生が出版した日本語・日本文学・日本語教育に関する図書を紹介し、未掲載の書籍については情報をお寄せください。

《二〇一九年》(追補)

◆佐藤泉他『戦後日本文化再考』(吉田山叢書)(三人社、一〇月)

《二〇二〇年》

◆山崎藍『中国古典文学に描かれた廁・井戸・簪―民俗学的視点に基づく考察』(勉誠出版、一二月)

《二〇二一年》

◆小松靖彦編『戦争と萬葉集』第3号(戦争と萬葉集研究会、二月)

◆秋元美晴監修『日本語を学ぶ外国人のためのこれだけは覚えた

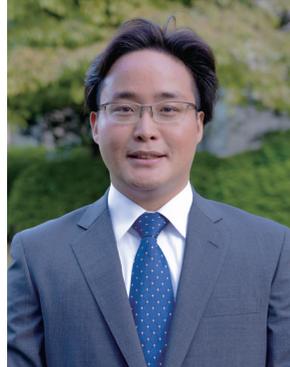
い!漢字練習帳500』(ナツメ社、四月) ◆佐伯真一『軍記物語と合戦の心性』(文学通信、四月)

◆高田祐彦『高木市之助 文藝論の探究』(近代「国文学」の肖像(岩波書店、四月) ◆田中祐輔他『文字・語彙・文法を学ぶための実践練習ノート』(凡人社、四月) ◆帆苅基生他『最後の文人 石川淳の世界』(集英社新書、四月) ◆篠原進他『安政コロリ流行記 幕末江戸の感染症と流言』(白澤社、五月) ◆宮川葉子編『栗只堂年録第九』(史料集) (八木書店出版部、五月) ◆矢嶋泉『現代語訳 藤氏家伝』(ちくま学芸文庫)(筑摩書房、五月) ◆近藤泰弘他『高校に古典は本当に必要なのか 高校生が高校生のために考えたシンポジウムのまとめ』(文学通信、六月) ◆掛野剛史他編『無縁の花』(水上勉) (田畑書店、一〇月)

◆佐藤泉他『対抗文化史―冷戦期日本の表現と運動』(大阪大学出版会、一〇月) ◆山崎藍他『とびらをあける中国文学―日本文化の展望台』(新典社選書)(新典社、一〇月) ◆山本啓介他『室町時代の座標軸 遣明船時代の列島と文事』(勉誠出版、一〇月)

研究室探訪

田中祐輔先生編



*まずは先生のご専攻を教えてください。

私の専門は日本語教育、日本語を第一言語としない方への日本語の教育です。理論言語学や応用言語学、教育学、歴史学、言語政策にも関わる、幅広い分野にまたがる研究をしています。

*その道を志したきっかけは何だったのでしょうか？

父が中国との国際交流事業の一環で、日本語を教えるために大連外国語大学に二年間派遣されました。

た。母や私も帯同しての赴任だったため家族で中国で生活しました。父を見て日本語を教えるという仕事を知り、また海外には日本語を懸命に勉強をする人がこんなにいるのだと知りました。それが最初のきっかけで、日本語教育の仕事に進みたいと考えるようになりました。私が大学へ進学した当時、日本語教育専攻はほとんどはなかったんです。父にも相談し、当時その分野の草分け的な存在だった筑波大学の日本語日本文学類に進学しました。

*そこから研究職に進まれたのはどうしてだったのですか？

一つは、日本語教師になろうと思ったとき、資格や研修に加えて、大学院で学ぶのが専門性の証明になると学部生の時に知ったからです。日本語教育者としてより幅広い場で活動するために、大学院へ進むことも考えてみようと思いましたが、二つ目は先生方や先輩に恵まれたことです。素晴らしい先生方の講義を聴き、学問の深さや世界の科学的な見方に感銘を受けたいです。授業を受ける中で、面白い、もっと知りたい、と思うことを突き詰める方法として、研究

がありました。三つ目は、大学の同期に進学を目指す人が比較的多く、特に親しい友人たちはほとんどが院や海外での研究を志望していました。彼らともっと一緒に学び議論したい、と思ううちに、自然と研究の道に導かれました。

*日本語教育とは、どういう研究なんですか？

日本語教育とは国語教育とは少し違って、日本語を母語としない方すべてを対象にします。日本語レベルや年齢、母語、文化背景など全く異なる相手に対する教育ということ、対象の多様性が大きな特徴の一つです。そのため、それぞれの方の言語の特徴や状況に合わせた語彙や文法を教えるための方法が検討されています。さらに日本語の教え方だけでなく、学習者の生活や人権について考える必要が生じることもあります。法律や制度、政策に目を向けることも求められます。日本語教師の専門性を構成する分野として「社会文化地域」「言語と社会」「言語と心理」「言語と教育」「言語一般」の五つがあるとされることもあります。対象が多様で、社会との関わりも深い分野であるため、様々

な領域に跨った知識や力が必要とされています。

*国立国語研究所の研究に携わってらしたり、先生の『日本語教育100年史映像アーカイブ』が内閣官房東京オリパラ大会推進本部『Beyond2020プログラム』にも認定されているとお聞きしています。先生はどのような研究活動をされているんですか？

主に三つの柱で取り組んでいます。一つは「日本語教育の歴史」の研究ですね。日本語教育の歴史は国際文化交流の歴史とも言えます。国と国とが交流する場合、相互に言葉と文化を学び合う必要があります。日本語教育は日本と諸外国との国際交流に非常に大きな役割を果たしています。私は特に戦後、日本が国際社会に復帰して、外国と協力し国際的な活動や問題解決をしていくうえで、日本語教育や育成された人材が担った役割を研究しています。国内外の機関でのフィールドワークや、関係者 外交官や事業担当者の方々、教師や教材の作成者の方々など(百五十名)へのインタビューに取り組んできました。

二つ目はコーパス(言語を分析

するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与したものの研究です。私は国語教科書に掲載されている語彙を抽出して分析する『COSMOS』というプロジェクトを行っています。特に日本語を母語としない児童が学校で日本語で学ぶとき、どこにつまづき、何が難しいのかを分析し、要因考察と教育法の提案します。ほかにも、成人用の日本語教科書なども扱います。

三つ目は先ほどの「歴史研究」と「コーパス研究」の成果を教育現場に還元する活動です。私は「教科書開発」に焦点を絞り、日本や学習者の多い中国や韓国での出版を続けています。最近ではDX（デジタルトランスフォーメーション）の動きも進んでいるので、デジタル教科書やアプリケーション型教材の研究・公開にも力を入れています。先ほどの『COSMOS』で構築されたコーパスは、世界三十四カ国で利用され、辞書や試験作成、継承語教育など、多種多様な目的で使用していただいています。日本語を必要とする人たちが世界中において、その数は想像

以上に大きいことを改めて感じています。

*今年赴任されてきて、青学はいかがですか？

青学はとても学習教育環境が良いですね。図書館や教室などの施設は充実していますし、先生方のご専門分野も、文学コースには各時代に複数の先生方がいらして、日本語・日本語教育コースにも専門分野の異なる先生が揃っています。



すね。それにキャンパスそのものと立地環境も素晴らしいです。表参道という国際性豊かな文化・教育の中心地に、これだけ緑豊かで歴史を持つキャンパスが存在することは貴重なことだと思います。学生が本当に幅広い視点で深く学び、豊かな経験を積むことができるとも良い環境だと思います。また、青学には温かい雰囲気があるように感じます。学生は懸命に学び、教職員も連携して学生を全力でサポートする素晴らしい体制が整っているように思います。

機会を設けたりしています。学生のみなさんが、これからの持続可能な社会、多文化共生社会を築いてゆく上での重要な視座を日本語教育からも学んでほしいと願っています。

*このコーナーで恒例になってきているのですが……先生の宝物は何ですか？

宝物ですか（笑）。教育や研究に携わる中で、とてもたくさんの方とお会いし、対話し、さまざまなことに共同で取り組んできました。人との出会いやつながり、そこで生まれた新しい広がりというのはまさに宝物で、日々大切にしています。

*学生にメッセージがあればお願いします。

青学はとても素晴らしい環境です。ぜひ幅広い視野に立つて学び、将来の糧になるような学問、経験、出会い、を通して、皆さんがこれから世界に雄飛する上で支えとなる力を存分に養ってください。

*貴重なお話をありがとうございました。

学生のみなさんがそれぞれの専門を大切にしながら、日本語教育を通して、ことばや文化を捉え直す視点、世界を見る視点、持続可能な社会を実現する上で大切な視点も得ることができますように日々取り組んでいます。例えば、日本語や日本文化を客観的に捉える方法や事例にたくさん触れてもらったり、異なる背景を持つ人たちと相互に理解し自国の言語文化を伝えるにはどうしたらいいか考える

日本文学同窓会から

日本文学同窓会会長

松岡 嗣直

この『会報』をお読みの皆さんの中には、現役の学生さんだけでなく、日本文学を卒業された方々も多いと思います。『青山学院大学日本文学』の終身会員になつている方もいらつしやるでしょう。

ところで「日本文学同窓会」も入会は任意ですが、終身会員制度はなく、年会費千円（振り込みは5年分纏めて5千円をお願いしています。手数料は不要です）を振り込んで戴くことになりました。入会の申し込みは「日本文学同窓会」や『あなたと青山学院』の「日本文学同窓会」紹介記事にメールアドレスが載っていますので、是非ご一報ください。振込用紙をお送りします。

入会戴けますと年一回発行される同窓会会報「ひいふうみい」が送られて参ります。昨年発行の16号より判型がこれまでのB5判からA4判へと大判になりました。

しかも15号までは2色でしたが、オール4色の全ページカラーとなり、表紙も一新されました。内容も充実しています。特集ページでは詩人の伊藤比呂美さん（78年日本文学卒）のインタビュー記事を掲載しました。伊藤さんがどのような大学生活を送られたのか、じっくり伺っています。

また例年行っている同窓会主催の「文学散歩」（正式名称は「教養講座」）の様子も紹介しています。20年21年とコロナ禍で実施出来ませんでした。今年こそは開催したいと考えています。別途参加費が必要ですが、同窓会員は割引になります。

なお、最後になりましたが、片山先生や小松先生の随筆も毎号好評で読み応えがあります。

こういった充実した内容の会報が同窓会に入会すると読めます。是非ご入会ください。

ところで、4年後の2026年は日本文学創設60周年です。日本文学と日本文学同窓会協働の記念事業も考えられます。その際は何卒ご尽力をお願い申し上げます。

二〇二一年度講義題目

〈大学院〉

上代文学研究（一）

萬葉・書物・文学交流の研究

中古文学研究（一）

『源氏物語』を読む

中古文学演習（二）

平安文学の注釈のあり方について

中世文学研究（二）

『六代御前物語』の輪読

中世文学演習（二）

『続千載和歌集』研究

近世文学演習（一）

読本『夢想兵衛胡蝶物語』を読む

近世文学演習（二）

『百合若大臣野守鏡』精読

近代文学研究（一）

研究テーマの展開を図る

近代文学研究（二）

近現代学会発表論文の完成

近代文学研究（三）

昭和期の作品からさぐる近現代の文学・文化・思想

日本語学研究（一）

コーパス言語学の理論と方法

日本語学演習（二）

ダイクシス研究

日本語学研究（三）

言語構造と語用論—文脈とその操作—

日本語教育演習

JSL児童生徒を対象とした日本語教育の課題と現状

中国古典学研究

『文選』精読

日本文学演習（一）

日本文学研究の方法論についての比較文学・比較研究的考察

日本文学演習（二）

衣笠 正晃

日本文学演習（三）

山崎 藍

日本文学演習（四）

田中 祐輔

日本文学演習（五）

大屋多詠子

日本文学演習（六）

韓 京子

日本文学演習（七）

片山 宏行

日本文学演習(二)

戦後の短篇小説を精読する

石川 巧

漢文学概論

中国文学が日本文学に与えた影響について

山崎 藍

日本文化文学入門

留学生のための日本文化文学入門

佐伯 眞一

現代短歌の研究と実作

大正から昭和初期、戦後の批評、論争、小説

日置 俊次

〈学部〉

文学研究法

日本文学研究の基礎や方法を学ぶ

韓 京子

日本語日本文学情報処理法

コーパスを活用した日本語の分析方法

三好 伸芳

書物・萬葉・交流の研究

小松 靖彦

芥川龍之介作品の精読

木村 政樹

日本語学概論

日本語の仕組みを学習する

小松 靖彦

『古今和歌集』精読

高田 祐彦

近現代の短篇小説の考察

西井弥生子

日本文学史

上代・中古文学史

高田 祐彦

日本語史

日本語の歴史について考察する

澤田 淳

『源氏物語』総角巻精読

土方 洋一

論じ方を鍛える

橋本あゆみ

中世文学史

山本 啓介

表象文化研究概論

表象文化研究の理解と実践

渡部 裕太

『枕草子』から古典文学研究に必要な知識・方法論を学ぶ

津島 知明

翻訳演習
最新の翻訳理論を踏まえた日本文学と翻訳の考察

WALLER, Loren David

江戸時代の文学史

大屋多詠子

日本学入門

海外から見た日本観・日本論

韓 京子

『平家物語』の輪読

佐伯 眞一

中国古典文学演習

中国古典詩歌(楽府、六朝詩、唐詩、宋詩、宋詞など)精読

山崎 藍

近代文学史

片山 宏行

日本文明史(英語講義)

孫 世偉

『羅生門絵巻』の輪読

杉山 和也

中国文学・思想演習

漢籍の写本を用いた基礎的な書誌学の知識習得と調査実践

高田 宗平

学問的な視点から見た古典の魅力と古典を読むことの意味

土方 洋一

文学交流入門

日本文学と外国文学の交流

韓 京子

人形浄瑠璃『曾根崎心中』の精読

韓 京子

文学交流演習

日本文学における「インド」

高田 宗平

近代文学概論

日置 俊次

戦時期の日本と中国の作家交流(英語講義)

孫 世偉

仮名草子を読む

大木 京子

日本語学演習

日本語の文法を見つめる

藏中しのぶ

短編小説の世界

日置 俊次

卒論を想定した発表・意見交換

片山 宏行

日本語学演習

澤田 淳

現代日本語の諸問題を考究する

加藤 祥

コミュニケーションにおけることばの意味や働きについて考察する

東泉 裕子

日本語学研究の方法論全般について

近藤 泰弘

方言や社会言語学に関する調査・分析

白岩 広行

日本語・日本語教育演習

方言研究や社会言語学に関する先行研究の発表・議論

白岩 広行

日本文学講読

『浜松中納言物語』を読む

千野 裕子

絵巻『道成寺縁起』とその関連作品を読む

杉山 和也

上代文学の代表作品を原典で読む

孫 世偉

芥川賞から見る戦後日本文学史

帆刈 基生

狂歌の歴史と近世狂歌の位置づけ

牧野 悟資

中国古典文学講読

中国文学作品を分析し、中国文学への理解を深める

山崎 藍

日本語学講読

コーパスを活用し、現代日本語を観察、分析する

東泉 裕子

書道の歴史と実技

書の歴史をふまえた基本的事項の理解と技法の習得

山下 由季

中国書道史について理解を深める

鈴木 晴彦

日本語教育概論

日本語の授業を行うために必要な知識や技術について学ぶ

田中 祐輔

日本語教授法

日本語非母国語話者に日本語を教えるための必要な基本知識を学ぶ

川端 芳子

特別演習

『萬葉集』・書物学・文学交流に関する卒業論文作成指導

小松 靖彦

平安時代の文学、及びそれに関連する対象を扱う卒業論文作成指導

土方 洋一

平安時代の物語・和歌を対象とした卒業論文作成指導

高田 祐彦

短詩形文学とそれに関連する作品を対象とした卒業論文作成指導

山本 啓介

主に中世文学を対象とした卒業論文作成指導

佐伯 眞一

近世前期の文学を対象とした卒業論文作成指導

韓 京子

近世後期の文学を対象とした卒業論文作成指導

大屋多詠子

近現代文学を対象とした卒業論文作成指導

片山 宏行

近現代の文化、文学、思想に関する卒業論文作成指導

佐藤 泉

卒業論文作成指導

主に中国文学を対象とした卒業論文作成指導

日置 俊次

山崎 藍

日本語学を対象とした卒業論文作成指導

近藤 泰弘

日本語学関連をテーマとした卒業論文作成指導

澤田 淳

日本語教育に関する卒業論文作成指導

田中 祐輔

日本語教育演習 A

日本語教育と教材・教具について理論的、実践的に学ぶ

田中 祐輔

日本語教育演習 B

教科書分析や教室活動体験から日本語を教えることについて考える

木田 真理

日本文学特講

『萬葉集』と日本文学

小松 靖彦

平安時代の物語について

高田 祐彦

『源氏物語』と説話世界

鎌倉末期から南北朝期の和歌・連歌

土方 洋一

軍記物語とは何だったのか

山本 啓介

佐伯 眞一

近世前期文学の諸相

水谷 隆之

『南総里見八犬伝』と八犬士

大屋多詠子

菊池寛の小説を読む

片山 宏行

文学作品から近現代の「生」「死」

の概念とその効果、変容を考察

佐藤 泉

横光利一研究―短編小説の世界―

日置 俊次

日本の伝統文化と文学／日本の近代文化と文学

小松 靖彦

文学交流特講

世界の中の日本演劇―能を中心に―

竹内 晶子

日本文学とアジア

中国近代の文学と思想を学び、中国と日本の関係を考察する

吉田 薫

日本文学とアメリカ・ヨーロッパ

世界各地の神話について

沖田 瑞穂

表象文化論

能と狂言についての多角的な考察

岩崎 雅彦

近世文学、主に演劇（人形浄瑠璃・歌舞伎）に描かれた事象を表象

の観点から分析

韓 京子

明治期における近代劇の表象

阿部由香子

日本文学特講A（集中講義）

日本文学の「受容」を理論と実践

の双方から考える

梅田 径

日本文学特講B

日本の伝統工芸や美術の体験を通して、日本文化を深く理解する

（英語講義）

孫 世偉

中国文学・思想特講

先秦から六朝時代までの文学・思想

松浦 智子

中国古典文学特講

唐の社会や詩人の人生を知り、唐詩への理解を深める

山崎 藍

日本語学特講

電子化コーパスを利用して文法記述を行うための方法論を学ぶ

近藤 泰弘

日本語の特質を探る―ダイクシスからみる日本語―

澤田 淳

福島方言の音声や文法の仕組みを

体系として理解する

白岩 広行

日本語教育特講

日本語教育の歴史および日本語教育の課題と展望について学ぶ

田中 祐輔

日本語教育実習

日本語上級レベルの外国人留学生を対象としたクラスの開講の準備、授業実施、事後評価活動

田中 祐輔

日本文学研究のための英語

日本文学の研究に役立つ英語力を伸ばす（英語講義）

WALLER, Loren David

音声表現法

日本語の音声について基本的な知識を学習し、発話の技法について考察、実践する

田川 恭識

日本語の音声機能を理解する（英語講義）

米山明日香

文章表現法

読み手を意識した文章表現の実践・文章技術の向上

木村 寛子



【研究室だより】

*二〇二一年三月の卒業生は二二〇名、四月入学生は一二六名でした。大学院前期課程の三月修了生は六名、四月入学生は六名でした。後期課程の修了生は一名、四月入学生は二名でした。

*二〇二一年度から新たに非常勤講師として、梅田径、沖田瑞穂、木田真理、鈴木崇義、田川恭識、竹内晶子、松浦智子、山下由季、WALLER, Loren Davidの諸先生方にご尽力いただきありがとうございます。

*二〇二一年度は、大屋多詠子教授が学科主任を務められました。

*二〇二一年度日本文学会大会（春季）・講演会・総会が、六月五日にオンラインで開催されました。講演会については本会報五頁をご覧ください。

*二〇二一年度日本文学大会（秋季）は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止となりました。

*副手の小池直さんが退任され、四月から佐藤美仁華さんが着任されました。

*二〇二一年四月より、日本語教育学がご専門の田中祐輔准教授が着任されました。

*二〇二二年三月をもって、中世文学がご専門の佐伯眞一教授が、定年のため退職されます。

【訃報】

*糸賀きみ江教授が、二〇二〇年二月にご逝去されました。享年九四。

*山田晃教授が、二〇二二年八月にご逝去されました。享年八八。

【ご退職される佐伯先生について】

合同研究室 本田 恵
佐伯眞一先生が二〇二二年三月をもってご定年を迎えられます。青山学院大学に着任されてから二十七年、先生はどんな時も優しく温かく、私たちをご指導くださいました。

佐伯先生の周りには、いつもたくさんのお学生がいたことを思い出します。困っている学生がいれば、どんなにお忙しい時であっても必ず声をかけてくださり、学生の話に耳を傾けてくださいました。在学中も、合同研究室の職員になっ

てからも、先生の的確なご助言に何度も支えていただきました。

コロナ禍でオンライン授業と なってからは、新しい機材やミーティングアプリなども意欲的に使われ、学生のために何ができるかと常にお考えくださいました。対面授業に出入りなくとも授業に参加できるようと、画面越しに学生へ積極的に話しかけられ、質問や困りごとはないかと一人一人と真摯に向き合うお姿が印象的でした。

いつもニコニコと素敵な笑顔で、学内を颯爽と歩かれている佐伯先生のご退職は大変寂しく、名残惜しいことですが、一つの区切りとしてご定年をお祝い申し上げますとともに、今後のますますのご健康とご活躍をお祈りいたします。

【編集後記】

前号を編集していただいた方には、次号にはもうコロナがらみの話も出さずにすむだろうと楽観していたのだが、変異株が次々と現れて、いまだに日本も世界も翻弄され続けている。したがって、というのは言い訳になるが、本号も「ウイ

ズ・コロナ」色となったのはいかんともしがたい。それでも、教員も学生も卒業生も、それぞれに現状を受け入れ、それなりにこの日常を前向きに乗り切ろうとする知恵と気概が、寄せられた文章には見受けられはしないだろうか。

リモート生活にも良さと欠点があり、それをいかにうまく使いこなし、取り込むか、など。案外、人間というのはこのパンデミックで学び、より発展するような気がする。であるにしても、次号こそは新生面でみなさんにまみえたいと切に願う。（片山宏行）

編集委員

片山 宏行 山本 啓介
安藤 絵理 伊藤 諒
学部三年生 江夏萌々子

会報 第五十六号

二〇二二年三月一日 発行
渋谷区渋谷四一四―二五
青山学院大学総研ビル10F
日本文学科学研究室内
編集 青山学院大学日本文学会
電話 (03)33409179
FAX (03)33409180